

昭和五十三年十二月一日 〓講演

「森鷗外と私」

ただいま、理事長さんから、極めて〓懇篤な〓紹介を頂戴した吉野でございます。今日は、森鷗外について話をしろということなので、夜分でございますますが、喜んで参上いたしました次第でございます。

一 鷗外との出会い以前

なぜ、私が森鷗外に惹かれたか、というお話をいたします前に、私自身と森鷗外との出会いまでのプロセスを、私事にわたって恐縮ですが、ちよつと申し上げてみたいと思います。

大学三年の時、人生航路に思い悩む

私は、今から四十年前、昭和十三年に学校を卒業いたしました。日本銀行に入行いたしましたのですが、大学三年生の時に、自分の人生航路というものを、どういうふうにとつたらいいのか、ということ、いろいろと思ひ悩んだのでございます。

父のあとをつぐ官吏にはなりたくない

私の亡くなりました父親は、ある官庁の役人を長いこといたしておった。中から見ていると、アラが目立つというんでしようかね、人民の上立って、人民を監督するということは、私の性に合わなかったのです。父は、私に、今でいうと国家公務員試験というんでしようか、当時は高等文官試験と言いましたが、外交官でも司法官でも行政官でも何でもいから、自分のように官吏になつてくれ、と言いましたけれども、私は、どうぞお父さん、それだけは自分の気にそまないから勘弁してほしい、と言って、試験を受けることは勘弁してもらったのです。

業界に入る気もなし

第二に、当時、経済の面で、日本資本主義発達史についての論争が、労農派と講座派ということ、非常に争われていたのです。独占資本主義という言葉が非常に学生の間ではやりだつたのです。若い純真な気持ちで一ぱいだつた

山一証券経済研究所理事長 吉野俊彦先生

私は、大企業に入つて、独占資本の尖兵になつて、利潤の獲得に狂奔するという気持ちにもなれなかつた。そうかといつて、中小企業に入つて一旗あげようというような、とてもそんな力は自分にはないということもよくわかつていたから、民間の企業に行くことも快しとしない。

「経済学」学もやりたくない

さて、それじゃ一体どうしたらいいのかというところで、私の恩師のところ、ちよつと相談に参りました。今の気持ちを卒直に申し上げましたところ、それじゃ研究室に残つて、学究としての生活をやらどうか、という甚だ親切なお諭しがあつたんであります。それも又、甚だおこがましい話ではあるが、私はお断りしました。何故かという、当時の日本の社会科学というのは、日本の土壌の上に立つて出来あがつたものでなかつた。外国の経済社会というものを背景にして出来あがつた、そういう学問な

んですね。語学のできる人が、早速丸善かなんかへ駆けつけて、他人が見ないうちに、新しい輸入された本を買って、語学を活用して、要約をなるべく早く学会の雑誌に出す。それが偉い先生だ、ということになっていました。私はね、どうもそういう経済学と言うよりは、「経済学」——これは戦後、都留重人さんが、そういう言葉を使ったのですが——そういうふうにいるのが一番私の気持ちにピッタリしてる、経済学は大事だけれども、経済学はたくさんだ、ということ、私はハッキリと申し上げたんです。

大学教授にもなりたくない

それともう一つ。私の知っている人で、まあ、親戚というわけではないのでありますが、ある大学の教授をおったのです。ところが、大学の教授、助教授というものの数には、非常に制限があるんですね。民間の会社だって、なかなか重役になろうと思つたら、大変なのですけれど、それ以上にもっと厳しい制約の下にさらされていたのは、大学の教授でしょうね。あのマックス・ウェーバーの『職業としての学問』という有名な本がありますけれども、あれを見ると、誰だって自分が助教授になった時、競争者を蹴落としてなっているから、いい思い出を持つている学者は一人もいない筈だという趣旨

のことを述べているのです。日本の場合には、学者相互間で姻戚の繋がりがいかに多いかということ、ハッキリ言うんですね、昼間、先生のアシスタントとして学問のお手伝いをするのならないけれども、私宅まで出入りして、先生のお嬢さんのお婿さんになるのが、一番教授になる近道だなんていわれたものです。若い私は、もうとても、そんなことはまっぴらご免だ、自分は、自分の結婚したい女性と、自分の責任において結婚するんだ。教授になるために、先生のお嬢さんに媚を売ろうなことはしたくない。その後段のことは、先生には申し上げませんでしたが、前段までは申し上げて、お断りしたんです。ドアを閉めて、先生とお別れをしようと思つたら、先生は「ちよつと待て。君、いったい、官吏になるのは嫌だ、大企業に行くのも嫌だ、中小企業に行くのも嫌だ、おれがせつかく学校へ残れと言つたのに、それも嫌だ。いったい、どうするんだ」というから、いや、私もどうしようもないから、困つて「家へ帰つて、もう一ぺん考えます」と言つた。

日本銀行の調査局入りをすすめられる

ところが「君、日本銀行の調査局ってのはいいんじゃないか。何故なら、日本銀行ってのは国の経済政策の一環としての金融政策を運営するんで、しかもこれはお役人じゃない、民間

の会社でもない。まあ、ある意味じゃ「ぬえ」のような存在だけでも、ちよつどそのぬえのようところが、君に適しているのかもしれない」と奨めてくれた。この調査局というのは、官庁は、その当時持つてなかつたんだ。民間の調査機関というのも、微々たるものだった。調査部や調査課のない銀行や会社が山ほどあった。「調査局があるのは、日本銀行だけだ。だから日本の現実に即して、日本の経済社会を少しでもよくすることに貢献すると同時に、他の局と違って調査局なんだから、勉強を続けていかなきゃ駄目なところに違いない。これは一番君に適しているんじゃないか」。こういうふうに親切にアドバイスして下さい。

日本銀行入社から調査局勤務までの曲折

当時は、今のように就職戦線が厳しくありませんでしたから、卒業する前の年の冬だったかな、日本銀行を訪れて、人事部へ行つて、今のような気持ちを卒直に述べたのであります。したら、すぐ帰れとはいわないで、そのうちに選考委員会を開いて試験をするから来いというんで、一週間ほどたちましたらね、四、五人の人たちで試験を受けた。まあ選考試験というと必ず何故ここを受けたかと聞くんです。私も聞かれたから、今言つたように、消去法でだんだんいろいろなもの一つずつ消していったので

す。そして最後に、私は少しでも日本の経済社会をよくすることに役立ちたい。だけど、同時に学生として学んだ学問をこれからも続けて行きたい。だから、私は日本銀行を受けに来たんじゃない。日本銀行調査局を受けに来たのだから、おかしな生意気なことをいうと思うのだったら、どうぞ、今帰れと即刻言つて戴きたい。もしなにか見どころがあると思つて、探ろうというのだったら、探る以上は、調査局に採つて戴きたい。こう申しまして帰りましたら、その晩電報が来て、採用内定したから、来年の三月に卒業したら、卒業証書持つて来れば四月一日から採つてやる、と。

こういうことで、四月一日に希望に胸をふくませながら、日本銀行の門を三度くぐつたのです。一番最初、聞きに行つたのと、試験の時と、それから四月一日と。当時大蔵大臣をやつて、それから日本銀行総裁になつた結城豊太郎という財界の大立者が日銀の総裁だつた。辞令をもらつてみるとですね、私はもう、「調査局勤務を命ず」と日本銀行で探る以上約束になつてんだから、そういう辞令をもらえろと思つたら、「計算局勤務を命ず」となつてゐる。私はだね、計算するために日本銀行に入つたのじゃない。調査局へ入るために日本銀行に採つてもらつたんだ。話が違ふと言つた。学生気分が抜け切らなかつたものだから、人事部長の所へ詰

問に行きました。

そうしたら、えらいどやされましてね。「君は今まで月謝を払つて、好きな先生の講義を聴けばいいというんだつたが、これから日本銀行は、君のために月給を払うんだ。ただ飯を食わすわけにはいかないので、金融政策に役に立つ調査をしてもらわなければならぬ。そんな学校出たての者に、いきなり調査局に行つて、空理空論を振り回されてはしようがない。計算所とは、貸借対照表を作るところで、中央銀行の活動というものは、必ずその勘定科目の変動に現われる。だから、そこで半年も勉強すれば、中央銀行の実体がわかつて来るから、その上で金融政策に役立つ調査をやつてほしい」。こう言われたんです。しようがないから、暫く我慢して、貸借対照表を作つた。

半年経つたら、総裁室へ来いというのでね、今度こそ調査局勤務を命ずという辞令をもらえるんだらうと、又希望に胸をふくらませて行つたところが、「岡山支店勤務を命ず」という辞令をもらつたので、ますます理想から遠ざかつていくような気がして、これは又人事部長に詰問に行こうかと思つたけれども、私も半年サラリーマン生活をやりましたら、人事部長の恐さがわかつたので、一級落としまして、人事部次長の所へ聞きに行つたのです。私は入行試験の時に、調査局でなきゃ採らないでくれつて

言つたのに、採つた以上は、調査局に入れて下さつてもいいんじゃないですかと言つたのです。まあ人事部の役職に就くような人は、肩たたきがうまい。泣かせるようなことを言うのです。私は明治生まれではなく、大正の初期の生まれですが、ウエットな人間でありまして、「いや、そういうようなことを言つて来るような行員は、純粹な気持ちを持った純真な人間がよくいうことなんだ」と肩たたかれたら、なんだかこう泣けてきちゃつてね。「昼間、皆この仕事をしている時に、君ばかりにかかずらわつてゐるわけにいかないから、今晚一緒に飯食つてね、ゆつくり君の不平不満も聞いてやろう。銀行の方針も君に教えてやろう」と言われましてね、ある所で「馳走になりました。「君が初めの志を変えず、銀行当局においても、君が調査局に勤務することが適當であると考えらるならば、人事部つてのはちゃんとしてますよ。主観的要件と客観的要件が合致しなきゃ駄目なんだ。どつちか片方じゃ駄目だ。今度こそ調査局に入れてやる。二年ほど辛抱して来い」と言われました。

やっと調査局に入る―新聞雑誌へ執筆する

私は、昭和十三年に卒業して、自分が狙つてゐた調査局勤務になつたのは、昭和十六年の初めのことでありました。それから一生懸命調査に専心したのです。日本銀行の調査局という所

は、金融政策に関連のある調査をやっているものだからね、マスコミとの関係が深くなる。調査にいくと、新聞や雑誌の記者がやって来て意見を聞かれるから、日本銀行の政策のPRにもなると思って、君はおもしろいことをいうから、ひとつ新聞や雑誌に書いてくれないかというので、若くしていろんなものを書き出したのです。私はそのために銀行の仕事をおろそかにした覚えはない。新聞雑誌に対する原稿は、必ず夜、家へ帰ってから書いていたのですけれどもね、あんまり頻繁に私の名前が写真入りで新聞に出て来る。重役以上に有名になるのは、これはよくないことらしいですね。いろんな風当たりが強くなってきた。あいつにはどうも昼間内職の原稿を書いてんじゃないか、というようなことをいう人も出てきますしね。いったい、あいつは日本銀行員なのか、経済評論家なのか、どっちが本職だかわからないじゃないかという、はなはだ心外なことを言われたのです、悩みましたよ、卒直に言つてね。せっかく、初めの志を達しようと思つて到達した調査局であつたのに、そこでなまじ有名になつたがために、そういうことを、重役、上役、同僚からいわれる。本当に心外でありました。その時にハタと思ひ出したのが、森鷗外だったのであります。

二 鷗外との出会い

一回目

私と森鷗外の出会いの一番最初は、私が中学生の頃だつたんです。鷗外が若くしてドイツに留学し、四年ほどおつて日本に帰つて来てから、ドイツの留学時代のいろんな思い出を書いた『舞姫』とか、『うたかたの記』とか、『文づかひ』とか、ドイツ留学記念三部作といわれる、鷗外の文学としては初期の極めてロマンティシズムに溢れた作品群なのですが、なんとなく惹かれるものを覚えた。しかし、それはそれだけのことに終わった。

二回目

第二回目の出会いは、ちょうど皆さん方の年頃だつた。私が大学生の時に、しよつちゅう行つていた正門前の本屋に、岩波書店から戦前の鷗外全集が出るという予告がされておつた。私は鷗外になんとなく惹かれるものを覚えたものだから、それを申し込んだのです。月に一回配本がありました。学生時分には、こんな三百頁や四百頁の鷗外全集の一卷を読むことは、極めて容易でありました。だから、学業の余暇に配本されてくると、すぐ食べるようにして読んだものであります。それによつて、私が知つた鷗外は、その鷗外の文学活動の極めて初期のものにすぎなかつた。鷗外つてのはもつともっと広汎な、珠玉のような数多くの作品を書いてい

る非常に幅の広い人なんだなあつてことを、その時知つたのであります。しかし、その第二回の出会いも、鷗外の幅の広さということを知つただけにとどまつた。

三回目

私が真剣に鷗外文学の研究にのめり込んでいったのは、第三回目の出会い以降です。第三回目というのは、既に社会の人となり、日本銀行の調査局員として、調査に専念する傍ら、マスコミにいろいろと署名入りで論文を載せるようになって、さつきいったような中傷と非難の集中攻撃を受けた時に、心の支えとして、ハタと鷗外文学を研究するということの中に、心の慰めというか、コンソレーションを見出せるのではなからうかという、淡い期待を持つたということでありました。

鷗外はサラリーマンであることを知る

どうして私が鷗外に思いをいたしたかという、それまで私は鷗外の書いた作品を読んだだけでした。しかし、全集を申し込みますと、本の中に月報というものが、毎月くつついてくるんですね。それに鷗外の人となり、鷗外の生涯、或は鷗外文学についての解説というものが載せられてたのです。その時、私は鷗外という人は、朝から晩まで専門に文学に専心した人

なく、東大の医学部を出て陸軍の軍医、中尉格の当時の官制で陸軍軍医副になり、それから累進して軍医中將格の軍医総監になる。現役の軍医としては、唯一最高の地位である陸軍省の医務局長になったサラリーマンだった、ということとを初めて知りました。もつとも、この「サラリーマン」という言葉は、源氏鶏太以来特有の意味があるので、鷗外をサラリーマンと呼ぶことに対して抵抗を感じる人は、いくらでもいるでしょう。サラリーマンを特定の意味に限定して考えるなら、適当でない表現かも知れませんが、しかし、私がサラリーマンといっているのは、月末に茶色い袋を持って、自分と自分の家族を養う月給取りという極めて広い一般的な意味であるところと了解願いたい。かかる定義の下においては、鷗外は立派にサラリーマンの一人であった、オーナーじゃないのですから。学校出て中尉からだんだん中將まで上っていった当たりまえのサラリーマンです。

サラリーマンとして最高位、文学者として珠玉の大作品集を遺したことに頭がさがる

鷗外がサラリーマンとして一生懸命仕事をしなければ軍医としての最高の地位に上がることは、まずできないでしょう。それでいてですね、このあいだ戦後第二回目の鷗外全集が大判で出たのです。四〇冊近くありますよ。いっ

たい、あんな長大な鷗外全集に収められた珠玉のような作品集というものは、朝から晩まで彼が文学に専心してでき上がったとしても、尊敬に値する。しかしだね、昼間一生懸命陸軍省でサラリーマンとして仕事をして、その方でも現役として最高の地位に上がりながら、なおかつあれだけのことをしたということの中に、私は非常に打たれるものを覚えるのです。

貪欲な私は銀行の仕事に感謝しつつ没頭しながら尚かつそこに自分の生命を燃焼し切ったとは思えなかった

私はどうもその就職の時の人生コースの選び方一つ考えても、貪欲だったことはおわかりでしょう。先生はお前みたいな欲張った奴はいないって言いましたよ。政策に関与しながら、現業は嫌で、勉強だけやりたいと、そういう職場はありませんかなんて聞いたひとはないと、こう言われた。私は確かに自分で考えてみて、そういう意味では極めて貪欲であるということとを認めるものでございます。日本銀行の仕事自体に、私は充分の生き甲斐を見出して、感謝しつつ毎日を送っていた。月給貰うのではなく、私の方が月謝を日本銀行に上げたいぐらいに思っただけで仕事をしておりました。あゝあ、と朝起きて、ああ嫌な銀行や会社へ今日も行くのかと、月末に貰う茶色い袋に入った月給は、銀

行や会社が私に毎日与えた精神的、肉体的損害に対する賠償であると、そんなサラリーマン生活をしたことありませんよ、私は。もしそんなサラリーマン生活をしている人があったら、ほんとに不幸な人だといわなきゃならない。それにも拘らず、私は日本銀行の調査の生活だけで自分の生命を燃焼しきったとは思えなかったのです。まだ他に何かやることがあるはずだと、こう絶えず思い続けていた。

鷗外もサラリーマン生活と専門の衛生学の研究だけでは生命を燃焼し切れず文学活動に入った

ところで、鷗外の書いたいろいろな『妄想』だとか、『カズイスチカ』とか、彼の中期の作品集であります、そこに私と同じような気持ちで述べられている。鷗外も陸軍の軍医としてドイツに留学して、当時最新の衛生学を学んで来たのです。衛生学の分野においても非常に学問的な業績を残している。普通の人だったら、もうそれでへとへとになり、それで充分満足したでしょうね。しかし鷗外は、昼間のそのサラリーマン生活と専門の衛生学の研究だけでは、鷗外自身の生命を燃焼し切ったとは思えなかったのですね。そこで、生来の文学好きで、文学活動に手を染めた。そして、当時としては、珍しいドイツ留學生活四年も送るといいうのが、

明治十年代の終わりのことでございます。

ドイツは、西ヨーロッパの世界の中では、当時は遅れた国であった。従って、そこに芽生えた市民的な自由の生活というものも、イギリスやフランスに比べれば、遅れていたのだと思うのですが、封建社会から、ようやく抜け出した日本に比べれば、はるかに進んでいたのではありません。そこで非常にいろんな文学の作品に親しみ、自分自身もいろんな、日本では味わえないような自由奔放な生活を味わったようですね。それを『舞姫』とか、『うたかたの記』とか、『文づかひ』とか、そういうドイツ留学記念三部作といわれる、私が一番最初に鷗外の作品に出会った、そういうものを留学から帰って来て生み出したんですよ。

サラリーマン世界の通弊——嫉視・中傷

——小倉第十二師団に左遷される

ところがサラリーマン社会は、厳しいものでございましてね。鷗外は昼間一生懸命陸軍の衛生のために仕事をしてるのです。それなのに、同僚や上役の間から、あれだけ膨大な作品をどンドン新聞や雑誌に発表するということは、これは容易な業じゃない。あいつは昼間上官の眼を盗んで、陸軍省で小説でも書いているに違いない、と告げ口する者が出て来た。そこで直属上官が鷗外を見張るんです。しかし、全

然そんな昼間に仕事さぼって内職をやっているというような事実も認められなかった。これはよくやっているじゃないか、同僚の中で一番よく仕事をしているじゃないか、ということが立証されたんです。

そしたら、今度は、相手も負けじとばかりにだね、いや、なるほど昼間仕事を一生懸命やっていることは認める。あれがやっている文学活動するのは、夜、自分の家へ帰ってからやっていることはわかったが、書いてるものの中味がよくない、女のことだの、セックスのことばかり書いてるんで、これは陸軍軍人の面汚しだと、こういうことになった。そこで、彼は明治三十二年、数え齢三十八歳の働き盛りの時に、東京の近衛師団の軍医部長から、今北九州市に合併されておりますが、九州の小倉の第十二師団の軍医部長に左遷されたのです。格は一級上がって行きましたけれどもね、当時の陸軍の常識では、東京の近衛師団と第一師団に勤めることは名誉とされていたのです。それが北九州の第十二師団というものの軍医部長になるということは、陸軍の常識からいえば非常にシエムで、恥辱的な処置であって、黙ってても辞表出して辞めるだろうと、こう思ってたという左遷が実行されたのです。もっとも、私は今ここが目白だから安心して東京から小倉へ左遷されたなんていつてんですよ。だけど、この間N

HKに頼まれて、北九州の市民会館で、文化講演会で話をした時には、気を遣いました。私も今六十三歳ですからね、皆さん方よりは多少は世の中の浮き沈みは経験してるんですね、東京だから安心して都落ちさせられたなんていつているけれども、北九州へ行って、「ここへ左遷されたんだ」なんて言ってるらんなさい。せっかく私のために集まって下さった市民の皆さん方が、ははあ小倉ってのは、そんな落ちた所かと思われては困るんで、私も気を遣いましたよ。これは当時の陸軍の中の話で、明治の初めの頃の話なんだと断わり、その頃は東京が一番いいというふうに扱ってたんで、同じ師団の軍医部長なら、第十二師団の軍医部長から第一師団や近衛師団の軍医部長になれば栄転だと皆思ってたろうけど、東京の師団から地方の師団へ行ったら左遷だと、そう見てたんで、私がさう思っているではありませんよってことを三度くらいいったら、やっとな手してくれましてけどもね。そりや皆さん、講演するといつたって気を遣いながら話してるわけなんですよ。ちようどその時、日本銀行の支店長の関君が調査局で私と一緒に仕事してたのです。先輩がやってくるというので、忙しい時だったけど応援に来てくれたのです。ちようど前の席に見えてたから、ここに日銀の北九州の支店長が来ているけれども、彼は本店の課長から地方の支店長

になると、これは日本銀行じゃ栄転だということになってる。だから彼なんか北九州へ行けといったら、欣喜雀躍してやって来たに違いない。だから彼にとつてはここは栄転の地なんだ。北九州へ来るということは、そのこと自体決して左遷を意味するもんじゃない、と四度くらい言いましたら、だんだん拍手が大きくなって行った。

生涯の友の忠言に、辞職を思い止まる

しかし、鷗外にとつては大変な左遷でね。辞表を懐に認(したた)めて、やめようと思つたのです。ところが、大学時代の同級生であり、生涯の友で、鷗外が亡くなる時に、苦しい息の下からも書く力もなかつた遺言を筆記して、鷗外が爪印を押しているのですが、この有名な遺言状を筆記してくれた賀古鶴所という人が、君ここで辞表を出したんじゃないか、敵の思う壺じゃないか、敵は君が悪いことをしてないので辞めさせるわけにいかないから、辞表を出したらどうだといわんばかりの処置をとつたので、ここは我慢して北九州でもどこでも行きなさい、と言つた。

新橋駅頭に見送つた将官は乃木大将ひとり

そこで彼は、一人淋しく新橋の駅から——

人淋しくというのは、鷗外は最初の結婚がうまくゆかないでね、自分の方から家を飛び出してゐる。だから、当時一人者だったんですよ。そういう意味でね——一人つきりで単身赴任したのです。その時に、将官級で、送りに来たのは、あの明治天皇の後を追つて割腹自殺した乃木さんだけだったのです。乃木さんはドイツ語のできない人だから、鷗外がドイツに留学している時に、陸軍省から命ぜられて、ドイツの陸軍の制度を調べに来た時に、鷗外の世話になつたので、非常に鷗外と親しかつた。乃木さんはああいう直情径行な人だったもんですから、出世が遅れて三度も休職になつてゐる。休職になるたびに戦争が起きるものだから、現役に呼び返されて有名になつただけで、本当ならもうとつくに那須野の農場で終わつてゐる人なのですね。その頃桂太郎という人があつたけれども、乃木さんが少佐の時に中尉だった。それが名古屋の旅団で、乃木さんが陸軍少将の時に、昔自分の部下だった桂太郎が中将で師団長でやつて来た。サラリーマンとしては非常な屈辱を味わつてゐる人です。だから親しい鷗外が左遷されて単身赴任をしてゆくというのを、将官として唯一人見送りに行つた。皆さん、サラリーマン社会というのはね、あゝ、あの人は今に社長になるだろうなんて思つたら、どこかへ行くなんて時は、停車場が一ぱいになるくらい見

送りが来ますよ。ところが、あいつは左遷されて、もう先がないと思つたら、誰も行きやしない。そんなところへ顔出したら自分もまた左遷される恐れがあるという社会なんです。その時に敢然として乃木さんだけが見送りに行つた。

鷗外は乃木將軍の自刃の正当性を寓する

「時代物」を書く——歴史物への転機

その乃木さんが、いろんな理由があつて、割腹自殺した時に、鷗外の受けた衝撃は大きく、鷗外は乃木さんの行為はアップトゥデートでないという世論が高かつた中に、乃木さんの行為は正当であるということ、『興津彌五右衛門の遺書』という作品で発表した。これは九州の細川藩々主が亡くなつた時に、割腹自殺した老人に託して、乃木さんの行為が正当である、ということを示したものです。そしてこの時を契機にして、鷗外は現代物から離れて、歴史物に沈潜してゆくんです。私はね、大変な友情だと思ひますよ。一人の親しい人間が割腹自殺するということによって、その人とき合つていた一人の人の作風を変えてしまふ。これはよほど深い関係があつたんじゃないかと思うのです。

須磨・明石あたりの車窓での感懐

こうして、乃木さんに送られて大阪を経由して須磨、明石辺を通って小倉に着任したわけです。鷗外の心は乱れてる。須磨、明石の辺を通った時に、景色があんまりきれいだったのですね。こないだ私は鷗外の生まれた津和野や、鷗外が左遷された小倉へ、鷗外文学同好の士で四十人ほど一緒に新幹線に乗って行きました。今、新幹線に乗ったって、味気ないですね。あの辺はトンネルばかりで、須磨、明石の辺から淡路島を望むなんてことはできなくなりました。昔の山陽本線時代のほうが、いい景色をゆつくり見ながら九州に赴任できたのです。鷗外の有名な『小倉日記』というのがありますが、それを見ますと、須磨の駅を通る時に、十二師団の軍医部長なんかになるよりも、須磨の駅長になったほうがよっぽどいいと書いてある。これも又、私がこの間国鉄に話しに行った時に、気を遣いましたね。駅長をばかにするのかというと、そうじゃないんですね。当時の明治時代は官制というのがちゃんとあって、十二師団の軍医部長は陸軍の少将格で、駅長さんよりも官等が上だったのでですね。何も、駅長がつまらない仕事しているなんていう意味は毛頭ないと、私はいちいち方々へ行って断わりつつ話をしているんで、これも辛い商売だと思うのであります。とにかく十二師団の軍医部長で左遷されてゆくくらいなら、こんな風光明媚な須磨の駅長で、毎日

いい景色眺めてるほうが、どれだけいいだろうという意味なんで、国有鉄道を馬鹿にしているわけでは決してないということを重ねて申し上げておきたいのです。

三 鷗外の小倉時代の文学活動―

少女に祭にかんざしを買ってやる

そういうことでやっと小倉に着任して、鍛冶町という所に今でも家が残っていて、このあいだ見に行きました。鷗外が生きてる時分にね、頭をなでてもらい、お祭りの日にかんざしを買ってもらった宇佐見マサさんというお婆さんは、この前行った時には未だ生きておられましたが、今年の六月に、鷗外のことを言いながら亡くなったそうで、会えなかったのは残念だった。これはまあ人生の原理なんで致し方ないが、非常なお年寄りのお婆さんで、鷗外にかんざしを買ってもらったのが生涯の誇りで、非常に心の優しい人だったようです。

母に心中綿々の手紙をたびたび書き送る

さて、鷗外は小倉に着きまして、どうも今度の左遷について飽き足らない。こういう状態だったら自分のほうから辞めないでも、いつ難癖をつけられて辞めさせられるかわからない。こういう情ない手紙を東京のお母さん宛に、たくさん送っています。これは鷗外全集の今度の版

には全部載ってますよ。鷗外があんなに有名になると思わないもんだから、小倉から送った鷗外の手紙を、家庭の人が物の裏打ちに使っちゃったんですね。それが鷗外が亡くなってから、蔵書を東大の図書館に寄付して、いろんな雑物はそのままになってたところ、戦後になって、鷗外の文学を掘り起こそうという運動が起こって、東大の方がまだ充分整理されてなかったいろんな雑物を引っくり返しているうちに、裏打ちされてる紙を引っぱり出したら、鷗外が小倉に左遷されて間もなく、お母さんに綿々と書き送った手紙が、断片だけでも、いっぱい出て来たのです。

私は鷗外を尊敬と言わず、愛敬する

それを見ますとね、あとで陸軍の軍医として最高の地位に上り、明治大正を通じ、私は第一の文豪であると信じてるこの人が、こんな情ない手紙を書くのかと思うような、人間性に溢れた手紙ですね。しかし、私はそれを見てこう思います。鷗外がどんな仕打ちに会っても、びくともしないユーバーメンシュ・Übermensch(超人)であるなら、これはもう近づき難い。尊敬はできるけれども、愛敬はできない。しかし、左遷されれば我々以上に嘆き悲しんでる。そこに私は非常に親しみを覚える。だから、私は鷗外文学を尊敬するとはいわないで、愛敬すると

言ってるのは、このためなんです。サラリーマン生活を同じくらしい期間やった私には、鷗外の苦しみがよくわかるような気がいたしません。ただね、普通のサラリーマンは、それで皆駄目になっちゃうんですよ。どっか一杯飲み屋に入って上役の悪口を言い、社長の悪口を言い、グダグダに酔っぱらい、酒と女に身を持ち崩し、果ては翌朝酒臭い息をはいて会社に来て来て、もう仕事の上でも明確にマイナスになる、とこういうようなケースが多いんじゃないかと、私は思うのです。

失意——立ち直り——蓄積の日が続く

けれども、鷗外の偉さは、半年ぐらいそういう情ない手紙をお母さん宛に出してしまいましたけれども、やがて立派に立ち直り、他日必ず自分の理想を実現する日もあるんじゃないかと、かと思つて、蓄積に努めたということと、ごさいます。その蓄積が、他日ものをいった。私は今日、皆さん方に申し上げたいのはね、人間というものが、苦しい悲境に陥った時の対処の仕方なんです。

『即興詩人』の翻訳——その影響

鷗外が左遷中に、どんな蓄積をしたかという、まず第一に華々しい文壇における創作活動というものは、ピタリと止めてしまった。その

かわりデンマークの有名な作家であるアンデルセンの『即興詩人』というものの翻訳を小倉で完成しました。もし鷗外が東京でタレントの生活をそのまま続けていたら、あの膨大な『即興詩人』の全訳はできなかったでしょうね。

皆さん、『即興詩人』は、今でも岩波文庫で二冊に入っています。古い文体であるけれども、実に綺麗な文章ですよ。デンマーク語はもちろん鷗外にはわからなかったもので、ドイツ語から重訳したものですけれど、亡くなった慶応の小泉先生は、イタリーに行かれるたびに、これはローマ、ナポリ、ベニスらそこら辺が舞台になつてるんで、必ず鷗外訳の『即興詩人』を持つて行つて、現地で朗々とお読みになつたそうです。この本は岩波文庫に入っており、安く手に入るから、暇があつたらお読み戴くことをお勧めいたします。明治、大正の文士で、鷗外の『即興詩人』を読んで感嘆して、自分も文士になろうと思つた人の中で、正宗白鳥は、まさにその一人なんです。『即興詩人』を読んだから自分は文学に志したといわれたぐらい、本当に美しい悲恋の物語であります。

サラリーマンにとっての翻訳の重要性、
時には隠れ装

私もしばしば経験があるんですが、皆さん、サラリーマンにとって、翻訳というものは非常

に重要なんだ。これは仕事をやってゆく上で、日本より進んだ技術なり、何なり取り入れようと、或いはビジネスのやり方、マネジメントのやり方を取り入れようという時に、外国語を知つてることが便利であり、それを翻訳するといふことが意味があるのです。私なんか日本銀行におりましたでしょう。経済情勢が、どうも物価が上がって国際収支が赤字になりそうなので、早目に金融を締めたいという論議を新聞や雑誌に私の名前で出した。しかし、だんだん私も地位が上がって来ますと、若い頃のように勝手なことが言えなくなつてきた。日本銀行の将来の政策方向を暗示するというふうにとられては、銀行に迷惑がかかる。そこで、自分の意見としてでなく、物価が上がりになり、国際収支が赤字になりそうな時に、健全な金融政策をとるので有名なドイツの中央銀行の総裁がどつかでこういうことを言つとる。そういう時には早目に、後手後手に回らないように手を打たなきゃいけない。それをドイツ語から早速訳して、新聞や雑誌に発表する。これを見る人が見れば、あゝ日本の情勢に似てるから、日本銀行は締めた方がいいと思つてしまうけれども、外からなんかいわれる時の逃げ道はある。お前、けしからんじゃないか、日本銀行は金融引き締めをやるという意志を暗示しとるじゃないか、といわれても、違いますよ、

これは千九百何年のドイツで、そういう状態になった時に、ドイツの中央銀行の総裁がそう言うてるだけですよ、日本のことと何も関係もありませんよと、こう言えるわけですね、翻訳には原作者が必ずあるから。

鷗外全集を読んでみますと、三分の一は翻訳ですね。あれはやっぱり陸軍の現職にあった鷗外として、日本の現代物を書きにくい立場だからでしょう。乃木さんが死んでからは日本の過去の歴史に移り、歴史に託して現代のことをいろいろと書いたんです。最初のうちは歴史に託して言いたいことを言っていたのではないかと思うんですね。

即興詩人(前出)

私は、何といっても『即興詩人』を完成したということは、鷗外が小倉に行ったからこそできたんだと思うんです。

ハルトマンの美学

第二に、ドイツの美学者でハルトマンという人がおりました。鷗外は美学、これは芸術の哲学ですけども、やっぱり文学活動をやる以上哲学的な基礎を持ってなければいけない。そこでハルトマンの美学を、いろんな形でまとめたのが、みんな小倉時代に出ております。美学ってのはね、哲学の分野の中でも一番わかりにく

いので、もう美学の本さえ出していけば、口のうるさい陸軍の軍人さんに叱られる恐れは絶対ない、と思っただらうと思えますね。

日記——ドイツ日記・小倉日記

それから、第三番目にやったことは、鷗外は非常に日記を書いた。まあ晩年になってからは簡単になったが、若い頃の『ドイツ日記』だとか、小倉時代の『小倉日記』などを見ますと、それ自体一つの文学作品のような、立派な日記を書き残した人なんです。けれども、自分が左遷されるについては自分にも落度があったんじゃないかなろうかと思っただけではないかと思えます。一つは『ドイツ日記』なんかを全部読み直して、清書してもらったため、東京にいるお母さんに、加除を行ったうえ、送っているんです。ですから、今日鷗外全集に入れられておりますドイツ日記は、小倉時代に原文を直したものを清書したものが載ってるだけなんです。本当のドイツ日記は、今日、鷗外全集には含められていない。私は、東京のどこか、或は小倉のどこかに焼いてしまわない限りあるはずだと思うんです。

『ドイツ日記』におけるエリスという

女性のことなど

そしてこの『ドイツ日記』の中には、この間

TBSの三時間番組で『獅子の如くに』と題して、鷗外の一生を劇化したのをカラーでやりましたね。鷗外はドイツにいた時、エリスというお嬢さんと知り合いになったが、私は実際は同棲してたんじゃないかと思うんですけども、あの『獅子の如くに』という劇では、同棲はしてなくて、結婚をする約束をしただけで、鷗外が日本へ帰って来る時に、次の船で追っかけて来た。これは本当の話なんです。ただエリスという名前は、本当の名前じゃないでしょうね。私はドイツへ行くと、金融、証券の用で行くんですけども、ドイツ人に会うと、昼飯の時間に、エリスという名前のドイツの女いるかねと、いつも聞くんですけど、そんな名前は絶対ないと言いますね。エリゼという名前ならいくらでもいる。有名なフェール・エリゼ(「エリゼのために」とかね。だけどエリゼというのをエリスちゃんとか、エリスヘンということがあります。あり得るかなと、ドイツ人も首をひねっている。)、本当の彼女の名前は永久の謎であります。しかし小倉に左遷されて日記を直す暇がなかったら、案外もとのまま彼女との交渉を詳しく書いたものが残ってたのではないかと思う。第一、小倉日記だってそうなんです。あれだつて、元の小倉日記なんてありません。あれだつて、直して清書したものが載ってる。これだつて、私が学生時代に買った鷗外全集には小倉日記

は入っていませんでした。だけど長男の於菟（おと）さんが昔、蔵の中で小倉時代の日記があつたのを見た。戦後、類（るい）さんという後妻との間に生まれた三男が、疎開先の箆笥の中に入れていたところを、二回目の鷗外全集が出る時に発見されて載つたのです。だから、私は、ドイツ日記の元の文が残されている可能性があると思います。

もし、これが出たら、この間、雄略天皇の名前を書いた鉄剣が出た以上に、新聞の第一面に出来ますよ。こりやもう世紀の大発見なんだ。もうそういうことを考えるだけで、皆さん生き甲斐を覚えるでしょう。サラリーマンで毎日銀行で仕事して、帰って来てビールでも飲んで、テレビでも見て、奥さんと話して寝ちまうってんだつたら、それつきりだよ。だけど、鷗外のドイツ日記がどつかにありやしないか、あつたら世紀の大発見だ。俺はもう興奮して、寝られなくなるだろう、なんて思うだけだつて嬉しいじゃないですか。そういう人生つてものを送れるつてことは、私は有難いと思つてんですけれどもね。

しかし、鷗外はそういうふうにはまじいところを抹殺するつて意味もあつたかもしれないけれども、やっぱり自分の日記を心して読み直すということとは、自分の性格にもどこか具合の悪いところがあつたんじゃないかという反省を

伴つたんだと思うな。それは、自分自身の性格を静かに反省するつてなことは、やっぱり左遷されて塾居しているような時でなければ、できることではないと私は思う。

フランス語の勉強

第四に、鷗外は何をしたか。鷗外は若い時分から——昔はもう東大の医学部の先生の半数以上はドイツ人でしたからね——ドイツ語はよくできたんです。ところがフランス語は充分にできなかったらしい。そこでヨーロッパに長くいた鷗外としては、フランスの文化も又ヨーロッパ文明も、フランス語というものを解つていなければ、よくわからないと思つたんでしょね。そこで、中年になってからフランス語を始めるんですよ。ある程度は知つてたんだろけれども、本格的に勉強するのです。

そこで、小倉にね、カトリックの教会がありました、そこにベルテランという神父さんが来てたのです。これがフランス人なものだから、師団の帰りに教会に寄つて、フランス語を二週間以上学んだ。これは私は経験があるが、中年になつてからの外国語というのは難しい。皆さん方のように、まだ頭の柔軟なうちに外国語はやれるだけやっておきなさい。三十八歳になつてから始めた外国語は、なかなかものにならない。しかし鷗外は立派なものにしたん

です。許されて東京に帰つて来て、彼の後期の文壇の活動が始まつてからは、やたらにフランス語が出てくるのは、そのためであります。

サンスクリット・印度哲学と

ドイツ語・ドイツ哲学との教え合い

それから、この間も行きましたけれどもね、足利尊氏が全国に一つずつ建てた安国寺つてお寺が小倉にあります。そこに玉水俊虎という有名な坊さんがいたのです。この人は、安国寺の本堂が古くなつてつぶれかかつていたので、浄財を募つて建て直そうと、それまで全然関係なかつただけでも、文章がうまい鷗外にその浄財を集める趣意書を直してもらつたために、師団の司令部に鷗外を訪れたのがきっかけで、二人の間に親しい友情が生まれた。鷗外は安国寺をしばしば訪れて、サンスクリット語を学び、インド哲学を教えてもらう。その代わり、ドイツ語とドイツ哲学を住職に教えた。いいですね、皆さん、偉い人は月謝をとらないで、お互いに知識をただで交換することができる。

クラウゼヴィッツの『戦争論』の講義

鷗外が許されて東京に帰る契機になつたのは、クラウゼヴィッツというドイツの陸軍の軍人の書いた『戦争論』という——これも岩波文庫に入つてる——これの講義をですね、十二師

団の将校以上の人に偕行社という所でやったということなんです。これもこの間その跡を見に行つて来ました。

普仏戦争でプロイセン（ドイツ）が、フランスに勝つたために、それまで日本の陸軍はフランスの制度を輸入して模倣していたのですが、当時まだドイツが統一されていなかったプロイセン、このプロイセンの陸軍のいろんなシステムを学ぼうと思った。参謀本部の優秀な将校をドイツに派遣して、フランスに勝つたプロイセンの陸軍の戦争のいろんな原理を書いたクラウゼヴィッツの本の研究をさせました。ところが、ドイツ語がえらく難しいうえに、哲学的な戦争論であるために、戦争を本職とする参謀本部の兵科の将校が音を上げて、誰一人読解した者はなかった。

ところが軍医である鷗外はドイツ語がよくできるから、簡単にこのクラウゼヴィッツの戦争論がよくわかった。そこでですね、ドイツへ参謀本部から送られてきた将校に、ベルリンで教えてやるんですよ。その教えた生徒の一人の山根武亮という人が、鷗外が左遷されて十二師団に行つた時にちょうど師団の参謀長だったので。井上光という人が師団長だったので。今度来る鷗外というのは、左遷されてやって来るけども、本当はよくできる人なんだ。参謀本部から派遣された自分でもわからなかったこ

とを、俺はドイツで教わつたことがあるんだ。今度あの先生がやって来たら、将校以上にクラウゼヴィッツの戦争論の講義をさせようじゃないかという、師団長は直ちにOKで、週何回か開講されて、師団長以下にクラウゼヴィッツの戦争論の講義をしたのです。そして、その講義があんまり立派だったので、講義を聴いた将校の若手が、そのメモを取つて陸軍の中の人に配つたのです。

このついに先に椿山荘があるでしょう。あれは日本の陸軍を創つた山県元帥の旧宅の跡でありますよ。それがその山県元帥の目にとまつた。山県元帥も最初は、鷗外は軍人のくせに女のことばかり書く、セックスのことばかり書く、ああいふのは九州へ送つちまうほうがいいと思つていた一人だつたと思つています。ところが、この十二師団の付属である偕行社でやつたクラウゼヴィッツの戦争論の講義録を見て、「森という人間は、軍の宝である」と一言言つたといふんです。

皆さん、サラリーマン社会は、「快馬随鞭影」。皆さん、解る？ これは漢文をやつた人なら解るんですけども、今はあまり漢文をやらないうんですけど、「良い馬は鞭の影を見て走る」ということなんです。どういふことかというね、いゝ馬はだね、主人公である人間が鞭で尻を引つぱたいで、東へ行け西へ行けと叩こうと思つ

鞭が、まあこれ曇っている日は駄目だけれども太陽が照っている時には、鞭の影の方角がどっちを指しているかわかるんでね。はゝあ、主人公がこれは東へ行けといつてるのだなと思うと、そつちの方へ、もう叩かれないうちに走ると、サラリーマン社会の諷刺ですね、と私は思ふんですよ。

山県元帥が、鷗外を「これは軍の宝だ、森は」と言つたということがわかつたら、今まで鷗外をいじめていた軍医の連中が恐れをなした。軍医でいくら偉くたつて中将だ。山県さんは元帥だ。私は山県さんという人は、はつきりいつてあまり好きじゃない。その二個師団の増設で、大正の政変をひき起こした。金融財政の立場からいうと、国力の限界を無視して軍備を拡充したので、私は感心せんけれども、山県さんの罪の半分は、鷗外を認識して、鷗外を東京に帰すよすがを作つたことで償われてると私は思ふんです。目白の椿山荘が近いから言つていいじゃない。

四 東京へ帰る——後期文学活動——

第一師団に帰る 満州転戦 軍医中將

それで鷗外は先に近衛師団の軍医部長から十二師団の軍医部長に左遷されたのですが、今度は近衛師団へ二度の同じ勤めはさせないで、陸軍が幸い東京に師団が二つあつたもんだか

ら、第一師団の軍医部長で帰すんです。日露戦争が勃発しなきゃ、そのあとで軍医総監になり、陸軍省の医務局長になったと思うのですが、鷗外が帰って来て間もなく、日露戦争が勃発したために、満州へ転戦したのです。戦争が終わって一段落した明治四十年に、やっと現役の軍医として最高の地位で、あとで官制改まって陸軍軍医中將になった。軍医に大將はないんですから、最高なのです。各師団の軍医部長は、少将格です。それを統轄する陸軍省の医務局長になったのだから、大学同期で出た者に九年三か月遅れたのです。サラリーマンで同期に入った者に九年三か月も遅れるのは、これはもう恥辱的な処置もいところなんです。けれども鷗外はじっくりとそれに耐えた。

暫くたってから、それこそだね、堰を切った水って言葉があるが、まあ翻訳から創作からどんどん出して来る。皆さん方が知ってる『牛タ・セクスアリス』だとか、『雁』だとか、そういうものは皆東京へ帰って来てからの後期の文学活動に属するんです。そして、さきにも述べた乃木さんの死に触発されて書いた『興津彌五右衛門の遺書』、そのあとに今度は『阿部一族』、これも細川の関係ですから、ここの和敬塾に関係があるんですね。そういう一群の歴史小説、はては『渋江抽斎』とか『伊沢蘭軒』という史伝、これは私は、日本の近代の文学史

上の傑作だと思ふのですけれども、そういうものを書いたんです。

サラリーマン生活の哀歎と文学傑作——

二足の草鞋

私は鷗外がサラリーマン社会の中で悪戦苦闘しなければ、ああいうものは書けなかったと思うのです。鷗外の作品をよく読んでごらん下さい。そういう月給取りというかね、昔は米で貰っていたんですから、歴史小説はお金じゃなくて米で貰った人のことを書いてあるわけですが、サラリーマン生活の哀歎というものが滲み出ていることが、すぐわかりますよ。本当に珠玉のような作品群だと私は思うんですね。『伊沢蘭軒』とか『渋江抽斎』とかいうと、皆昼間は殿様の脈をとる御殿医ですよ。夜中になると、突然歴史学者或いは考証学者に変身すると、二足の草鞋を履いた人のことを愛情をこめて書いているんです。鷗外が二足の草鞋を履いて苦労しなければ、あんな日本文学史上の最高の傑作は生まれなかったに違いない。だから、いじめられたほうがいいんですね。あんまり幸福な生活をしてるとね、それに満足して、いいもの書けないですよ。そういう意味じゃね、苦労したほうが人間てものは、いいんじゃないかと思う。

私は貯蓄講演の最後に精神貯蓄論をする

私は、日本銀行にいる時に、よく貯蓄推進部に頼まれて貯蓄講演をやってくれといわれたのだけでも、私は自分自身があんまり金銭的な貯蓄をしないで、根太が抜けるほど本を買ったので、私の財産は本である、書庫である。ですからね、物価が上がってる時に自分がやってない金銭的な貯蓄をやれやれというのが嫌だったから、貯蓄推進部から貯蓄講演を頼まれると、まあ金銭的貯蓄のほうはちよつとでお茶を濁して、最後に人間はいじめられて、精神的な貯蓄をやった者があとで傑作を生む。貯蓄というのは金銭だけじゃない、精神的な蓄積なんだ、ということと言ったら、もう貯蓄推進部から頼みに来なくなつた。そのうちにね、あいつに頼むと、変な話ばかりで本題から逸脱して貯蓄推進上困るというのです。それが私の狙いでした。私は経済講演なら、いくらでもやるけども、自分がよくやってないことを他人に勧める気にはなれないので、嫌ですとはいえないから、そういう形で自然に断られるのを待つような話をしたら、ちよつとそれが私の作戦通りにいったのであります。

サラリーマン大文学者・鷗外に心惹かれる

私が鷗外に非常に魅力に惹かれるというのは、彼が専門の文士でなくて、サラリーマンで

ありながら、あれだけの仕事をした。だから将来皆さんが、サラリーマンになって、会社に縁あって勤めて、そこに生き甲斐を見出さなければならぬことはもちろんであるが、それでもなおかつ自分の生命を燃焼しきったと思えない場合には、なにかもう一つのものを持ちなさいと言いたい。しかし二足の草鞋を履くということは、通常のサラリーマン生活と違って、中傷を受け非難を受けることもあります。しかしそれに耐えて何か蓄積して、そして他日認められて自分の能力を充分に發揮した時は、すばらしいものを産み出すことができる。まあそういうことを申し上げたかったんです。

わが二号書庫はさながら鷗外書庫

最後に私が申し上げたいことは、鷗外の全作品を、そういったサラリーマンの哀歎の角度とすることで、見直してみたらどうか。私には二号書庫というものがありません。これは妾宅の二号のことじゃありませんよ、家内の公認でわが家の庭の隅にある書庫です。本宅のほうにあまり経済の本以外のものを置くと一度根太が抜けて家内におこられたもんだから、もうほとんどにして経済の本以外の文学の本は根太が抜けても大丈夫なように、別の所に置いてあるんです。その集めた鷗外論というものはね、やつぱり皆専門にする人が書いたものが圧倒的

に多いんですね。

サラリーマンの哀歎という角度からするわが鷗外論五巻

そういう角度が、なんか生意気だけでも希薄なように思われる。私は経済が専門であつて、文学は全くの素人であります。だからそんな鷗外論を何冊も書こうなんて気はなかつたんですけれども、ここで皆がやってない鷗外の全作品を、サラリーマンの哀歎という角度から見直したものを書いてやろうと、一つの野心を起しました。

そう思いまして、最初は月刊『エコノミスト』という、今は廃刊になりましたが、それができた時に、ちょうど日本銀行の調査局に入りにいた記者が、私が鷗外が好きだということを知つたもんだから、今度は経済雑誌ではなくて人生雑誌だから、あなたにいくらでもスペースを提供するから鷗外の論文を書きなさいというから、書いたのです。そして二年、二十四回続けたら、ちょうど一冊の本になつたんです。『森鷗外私論』と銘を打って出した。あとはもうそんな毎月毎月雑誌に載せてることがもどかしくなつて、書き下ろしで、二冊目は『続森鷗外私論』、三冊目はこないだ『あきらめの哲学』を出し、今四冊目の『権威への反抗』を、八割ぐらい書き終えたところなんです。五冊目

は『死を見つめたサラリーマン 死に直面して』と、これはまだ仮題でありますすがね。その五冊が完了すると、サラリーマンの哀歎という角度から見た森鷗外評伝が完成するので

私は今鷗外と鷗外文学と共に生きている

私は銀行や証券の仕事は十二時までで終えて、一刻も早く二号に行きたいんですね。そして鷗外の文学に必ず毎日何かでも触れ、そのいい所を書き写しておくんです。普段なかなか文章を書けませんからね。それは日曜日とか祭日が重なつた時とか、夏休みとか、お正月の休みに、本文を書くのですがね。普段は鷗外文学をどく読み、或は鷗外論を読んで、大事な所の引用文を写します。今日はコピーの機械が発達してるから、本職のほうは手でものを写すなんてことは今はもうしない世の中です。全部機械がやってくれる。だけど、私の文学の研究のほうは、自分の文章の訓練にもなるし、コピーの機械なんか使つたらいけない。自分の手で、ハンドライティングで大事な所を写すことにしている。

今日も鷗外全集、これが戦後第一版です。これを常に持って歩いてんですよ。私の生活と鷗外は切り離せないものになつてます。不思議なものですね。私は鷗外の話に頼まれたり、

鷗外論を書いたりするようになることは、日本銀行に入る時は考えていなかったことです。金融、通貨の本は今に書きたいなあぐらひは思っています。書いたけれどもね。私は今まで百十九冊ぐらい本を書きましたけれども、大部分は通貨・金融の本です。その中の三冊だけは鷗外論なんです。ところが不思議なことね、本業のほうの通貨・金融の本なんか書いたって、売れ行きは知れたもんですよ。文庫本は別ですよ。何十万と出てるものもありますよ。日本銀行史なんて書いたって、三千か四千も売ればいいほうなんです。だから変なもんですね。私の余技の文学の本のほうがよっぽどよく売れるんです。私は鷗外先生のことです。所得を得ようなんてことは、夢にも思わなかった。全く世の中ってものは、皮肉なものなんじゃないかと思うんですけれども、私はそういう意味では、昼間の仕事にも生き甲斐を見出しているんです。

諸君が将来サラリーマン生活に全力を傾倒して尚かつ満ち足らぬものがある時、私の今宵のこの鷗外論を思い出してほしい

皆さん方は今学生さんだから、私の話そうとされている意味がよくわからないかもしれないが、いまに世の中に出て、そして自分の第一の企業なり官庁なりにおける生活に満足を見出せる努力をなさると同時に、もしそれだけで満

足できないようなことがあったら、私の話を思い出していただければ、大変幸いです。どうも今日は雑駁な話で失礼いたしました。
(拍手)

(文責在記者)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。